



日本でテレビタレントとして活躍し、昨年12月に駐日ベナン大使に就任したゾマホン・ルフィンさん(48)に、アフリカの未来を聞いた。

日本に留学しようと思ったのは、資源もないのになぜ経済大国になれたか知りたかったから。でも日本はあまりに遠い国で、学校では日本人はちよんまげをして刀を身につけている怖い人たちだと教えられていた。

日本ではお金がないから食事は1日1食。お昼は水道水をおなかいっぱい飲んだ。授業の後は深夜までバイト。1日3時間しか眠れず、バイト先の工場では左手の人さし指を切断した。でも労災保険でお金が出て学費を払うことができた。指が10本のままだったら今のゾマホンはいなかったから、神様に感謝している。

上智大学院で、ベナンの初等教育を日本や中国と比較した。日本が成長できたのは識字率がほぼ100%だったから。

### 駐日ベナン大使 ゾマホンさん(48)

## 重要援助を育てる人

ベナン中部の町で生まれる。国費による6年間の中国留学後、94年に来日。上智大学院に在籍中の98年、テレビのバラエティー番組出演をきっかけにタレントとしても活動。著書「ゾマホンのほん」などの印税などでためた資金でベナンに小学校や日本語学校を建設した。

だから私も母国に初等教育を普及させるために小学校を建設しようと思った。卒業生には大学に進んだ人もいるよ。

日本語学校の授業料を無料にした。日本のすばらしいところは、自分よりもみんなのことを先に考える集団主義。日本語を学ぶことで、そうした日本の文化や行動様式も身につけることができる考えた。

逆に日本人は豊かなのに、アフリカのことをあまりに知らない。戦争やエイズ、飢饉といった否定的な情報ばかり。ベナンのように平和な国もある。実際にアフリカに来て、自分の目で見て欲しい。

アフリカに未来はある。でも若い人の力を伸ばせるかは教育次第。ベナンには「魚を欲しがると友達に毎日魚をあげるよりも、魚の取り方を教えた方がいい」ということわざがある。食糧援助はありがたいが、人を育てる援助はもっと重要です。いつかベナンを「アフリカの中の日本」にしたいね。(聞き手・平賀拓哉)